

## 会長任期を終えて

中尾真一（工学院大学）



2005年5月の日本膜学会第27回年会時の総会で古崎新太郎前会長の後を受けて会長に就任して以来、2期4年間会長を務めてまいりましたが、本年5月の第31回年会時の総会で半田哲郎新会長に無事バトンをお渡しすることができました。これもひとえに会員の皆様、理事、評議員の役員の皆様のご協力、ご支援のおかげと深く感謝申し上げます。

この4年間にはいろいろなことがありました。まず始めは会則の整備です。これは古崎前会長の時から高桑雄一理事に担当をお願いして進められていた案件ですが、従来、ややもすれば明瞭ではなかった理事会や評議会の役割分担を定義し、その他委員会の位置づけ等も検討して学会としての組織体制を固め、総会の議を経て2006年6月9日に改正することができました。実質的な活動に影響があるものではなかったのですが、30年近い歴史をもつ伝統ある学会としての組織体制の明確化はやはり必要でした。

そういう意味では、学会の2大行事の一つとして定着している秋の膜シンポジウムの運営もオープンにする必要があると考え、それまで関西地区の有志で運営されていた組織委員会を、学会の公式の組織にすることにしました。これまで運営に携わってこられた委員の皆様のご同意を得て、膜シンポジウム運営の経費も学会経理の中に取り入れ、同時に開催場所も広く西日本地区ということにし、関西地区とそれ以外の地域との一年交代にすることにしました。

初めて京都を離れたのは2007年11月に開催された膜シンポジウム2007で、山口大学の喜多英敏先生と比嘉充先生に組織委員長、副委員長をお願いし、宇部市の山口大学工学部で開催しました。京都を離れると参加者はいったいどのくらいになるのか全く見当がつかず、喜多先生、比嘉先生ともはずいぶん心配なさいましたが、お陰さまで多数の皆様が参加してくださり、京都を離れるということも成功裡に終わりました。

年会の方は2006年の第28回年会は北海道大学の稲葉睦先生に組織委員長をお願いしましたが、先生はせっかくなので北海道大学で開催したい、そうすると例年の5月開催ではまだ寒いので6月に開催したいという強いご希望でした。膜学会の年会は、それまで大阪で開催した第6回と、つくば市で開催した第19回を除くとすべて東京での開催で、東京以外は3回目となります。はたして札幌まで皆さん来てくださるだろうかという心配（稲葉組織委員長）と、いや逆に札幌なら参加者が増えるのではないかという楽観的意見（小生もこの意見でしたが）とで二分しましたが、結果は後者の勝ちで、例年以上の参加者で大成功でした。

日本膜学会は1978年1月1日の発足ですので、2008年1月1日で30年が過ぎたこととなります。そこで2008年5月の年会では「膜学会30周年記念企画 - 膜学会30年間の歩み - 」を開催しました。この年会の組織委員長は半田哲郎先生で、先生のご尽力で歴代会長も多数ご出席くださり、昔の懐かしい写真も多数紹介され、大成功でした。

また本年開催された第31回年会では、かねてより提案のあった学生賞が、高木良助組織委員長のご尽力で初めて設けられました。これまで膜学会年会では学生の発表はあまり多くはなかったので、はたして応募者がどのくらいいるか心配だったのですが、おかげさまで多数の応募があり、第一回の学生賞を8名の方に差し上げることができました。今後学生の発表がもっと増えることを期待しています。

最近あまり膜学会の出版物は出ていなかったのですが、以前に出版した「膜学実験法」がだいぶ古くなり、内容の改定が必要だろうということになりました。出版社にあたりましたが、部数の出ない本の出版は好まれず、出版を断られてしまいました。そこで、最近の原稿はすべて図も含めて電子ファイルで上がってくるので、いっそのこと膜学会から直接CDで出版したらどうだろうということになりました。書店では販売できませんので、

膜学会へ申し込みのあった部数のみの販売となります。大きな決断でしたが、「人工膜編」を2006年12月20日初版第一刷、2008年5月12日初版第二刷として出版し、一回の製作部数は少ないのですが順調な歩みです。これをテキストとした「膜学実験法 人工膜編」の講習会も多くの参加者で順調に開催されています。

国際会議はICIM10 (10th International Conference on Inorganic Membranes) を2008年8月に松方正彦先生に組織委員長をお願いして早稲田大学で開催しました。海外から多数の参加者があり、大盛会でした。そのほか、日本膜学会は主催学会ではありませんが、共催学会ということでICOM 2005 (International Congress on Membranes and Membrane processes 2005) がソウルで、またICOM 2008がハワイで開催され、日本膜学会の会員も多数参加しました。ICOM 2005では学生賞がもうけられ、日本膜学会もスポンサーとなりました。

アジア・オセアニア地区の膜学会の連合体としてスタートしたAseanian Membrane Society (AMS) はAMS学会を2006年に北京でAMS 3、2007年に台北でAMS 4として開催し、回を追うごとに発表件数、参加者数ともに増え続けています。AMS 5は本年7月神戸で開催されます。

このように見えてくると、会長就任以来いろいろなことが次々とあり、この間膜誌の編集委員会、発行もあり、何かと忙しい4年間でした。しかしおおむね順調に運営できたかとホッとしていたのですが、最後に来て肝心の学会経理状況が最近の経済状況を反映して思わしくなく、2008年度は赤字決算となってしまいました。法人会員の減少、広告収入の減少などが大きな要因です。このため、2009年度も赤字予算を組まなくてはならず、これを半田新会長にお渡ししなければならないことを誠に申し訳なく思っています。

今の経済状況がいつまでも続くわけではないと思いますので、半田新体制の下、膜学会の運営が経理的にも早く安定し、その活動がますます活発になっていくことを期待しています。最後にこの4年間の会員の皆様のご支援に感謝し、会長退任の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。